成人
SEIJIN

特集

私の信仰体験記

青年会旭日分会会報『成人』立教185年10月号

巻頭言

今号の『成人』のテーマは「私の信仰体験記」と題した。

天理教にかかわらず、神の存在は信仰生活の根本を支えている。信仰する対象としての神が存在しなければ信仰生活というもの自体が成り立たない。神の存在について思案する時、教祖の次のお言葉が思い出される。

教祖のお側に仕えていた数人の先生が、人々から天理王命の姿は有るのか、と尋ねられますが、その時はどのように答えればよろしいでしょうか、という旨をお尋ねになった。すると、教祖は次のように仰せられたという。

「あると言えばある、ないと言えばない。願う心の誠から見える利益が神の姿やで。」（道友社『正文遺韻抄』１３８頁）

実に明快かつ味わい深いお言葉である。そして、私はこのお言葉が神の存在に近接していくためのプロセスをお示し下されているように思えてならない。「あると言えばある。ないと言えばない」という部分は「あると思う者にはある。ないと思う者にはない」という意味に近いのではないだろうか。頭からそれを無いものだと決めつけている者にその存在を認めさせるのは極めて難しいことである。しかし、反対に「神様はきっといてくださる」と信じる者の前には、神の存在を感知できる可能性が広がっていると思う。そして、「神様はいる」と信じた上で、神にすがり、御守護を願い乞うことである。親神様は我々の真実の親であり、子どもである人間をたすけたい一条なのであるから、子どもがたすけて欲しいとすがれば当然たすけて下さるのである。しかし、『みかぐらうた』に「むりなねがひはしてくれな」とあるように、親というのはどんな身勝手な願いでも聞いてくれる存在ではない。願う人の心が誠でなければならないのだ。「誠」とは突き詰めて言えば「人をたすける心」である。「自分がたすかりたい」「自分が良い思いをしたい」という自己中心的なほこりの心をすっかり忘れ、「とにかく人様にたすかってもらいたい」という利他の心で願えば、親神は不思議な利益を現してくださる。そして、そこに現出した御守護が親神の姿なのであり、親神が存在していることの証であることをお示し下されていると考えるのである。

今号の『成人』では、布教の家や修養科などにおける信仰体験記を掲載させていただいた。はなはだ成人の至らない私達青年ではあるが、ひたすらに神の存在を求めてがむしゃらに信仰した実践記録であり、こうして文章にまとめる上げることが本人の成人の一助になると思うのである。また、これがご一読いただいた読者にとって、道を通るうえでの心の栄養となれば望外の喜びである。

（松田）

修養会体験記

私はケガをして1年間働けませんでした。ケガの影響で自由に体を動かす事ができず、周りの友達が就職して働いている中、「自分だけ何をしているのかな」と思っていました。時間には余裕があったので、親や櫟本の会長さんの薦めで修養科に行くことになりました。しかし、おてふりも知らない、天理教のことも全く知らない状態で修養科に行くことになったので、正直全く乗り気ではありませんでした。いざ行ってみると、朝夕二回のおつとめはしないといけないし、早朝の神殿掃除の日にはまだ外も真っ暗の中歩いていると、「一体僕は何しているのかな」という感情も湧いてきました。その頃の私にとって、修養科や天理教は全くといっていいほど魅力的に映りませんでした。

モチベーションの低いまま修養科に通っていると、ある日の授業で心の敷居を低くして生活するということを教えてもらいました。心の敷居を低くして生活すると当たり前の事が当たり前でないと感じることが出来るとおしゃっていました。ケガをして自由に体を動かすことができない期間があったからこそ、私にはこの言葉がとても心に滲みました。初めは修養科に行くことに対して全く意欲的ではありませんでしたが、3ヶ月修養科に通うことで考え方が180°変わり宗教に対する捉え方も変わりました。

世間では現在、統一教会の問題で宗教が問題視されています。私自身も宗教や天理教に対して疑念を抱いていました。しかし、修養科に通うことで宗教や天理教に対する捉え方が変わりました。最初は漠然と宗教や天理教は怖くて変なものとしか思っていなかったのですが、修養科に通うことで天理教は生き方のコツを教えているのだなと思いました。これからは天理教の教えをベースに生活していきたいと思いました。

上田 裕司（うえだ ゆうじ）
天理市出身。櫟本分教会所属。２６歳。
愛媛大学大学院理工学研究科卒業。

神を感じた瞬間

松浦　治

数年前、私は大教会にて青年勤めをさせていただいていました。そこで一人の男性のOさんと出会いました。その方は精神疾患を患わっており、私が事務所当番をしている時によく大教会に怒りながら来会され、「大教会長さんはおられるか？」と尋ねられます。大教会長様は講社のお参りやご本部の御用でお忙しいので、その旨をお伝えすると激怒し、日々の不足を一方的に私に話され、一通り話されると少しすっきりしたような顔をされ帰られます。また、雨の日など天気が悪い時には電話をしてこられ、同じ話を一方的に話され、そして怒られます。そのようなことが青年勤め中、多い時で1週間に１度はありました。更にOさんが不安定な時には、1週間ほど連続で来会と電話があり、来られるといつも２、３時間ほどは話されます。毎日積み重なってくるとだんだん嫌になっていき、いつも車で大教会の黒門を勢いよく入ってこられるので、その車を見た瞬間「またか」と不足をしてしまっていました。Oさんは昔からその病気を患わっているみたいなのですが、他の先輩青年さんたちに相談しても、こんなに頻繁には来会されていなかったみたいで、次第に「なぜ私が事務所にいるときにこんなにも来会されるのだろう」と思っていました。

その後、青年勤めを終え、布教の家石川寮に入寮させていただきました。入ってすぐに育成委員の先生方よりお仕込みをいただいていますと、ある先生がこうおっしゃられました。「神様は一人ひとりのいんねん、成人に応じてお助け先を与えてくださる。アル中のいんねんがあれば、アル中の方とばかり出会い、金銭に関してのいんねんがあれば、お金に困っている方と出会う。寮生一人ひとり面白いように分かれてくる。」とのことでした。その時、私は心の中で「自分には何のいんねんがあるのだろうか」という疑問を持つと同時に、「どんな方と出会っても自分のいんねんによってお引き寄せ頂いた方なんだ」と心を治めて、一生懸命つとめさせていただこうと思いました。

そう思っていると、入寮1週間ほどで７０代の女性のHさんと出会いました。その方も精神疾患を患っており、２0代までは日本で育ちましたが、自身の都合のため海外へ移住され、そして数年前に身上の療養のため、日本にまた帰ってこられたとのことでした。そういった経緯からHさんは近所に友人も多くなく、次第にインターネットにはまっていったとのことで、僕と出会ったときには政治的思想がかなり偏りがちになっておられました。そんな中僕が出会い、よく話や愚痴などを聞きにお宅まで伺わせてもらうことになりました。また用事などでいけない時には電話でお話を聞かせていただきました。少し耳が遠いこともあり、お話し中は気が済むまでほぼ一方的に話され、だいたい行けば半日は聞かせてもらい、用事などでいけない時には電話でお話を聞かせて

いただきました。精神的に好不調の波があり、不安定な時は朝晩関係なく電話をかけてこられてお話をきかせていただきました。 その他にも、引きこもりの男性やパニック障害、鬱病の方などにも出会い、他の寮生と比べても明らかに精神に不安を持っておられる方と出会わせていただいてるなと感じるようになりました。

そんな中、寮の育成委員の先生の提案で、父方と母方の信仰初代からの家系図を作ることになりました。そこで、両親に電話でそのことを伝え、家系図を作りました。出来上がって見てみると、特に父方の家系において引きこもりや鬱病の寸前まで行かれた方など、精神的に不安定な方が多いことを知り、祖父においては当時でいう精神分裂病にかかり、その際親戚知人にとてもお世話になっていたということがわかりました。その時初めて、こうして精神疾患の方と多く出会うのは家系的ないんねんであり、通り来たりの道であり、今僕はそのいんねんを神様に見せていただいていると感じました。正直なところ同じ話を数時間も聞かされ、怒鳴られ、なぜ自分はこんなことをしているのだろうと感じることが多くなっていましたが、家系図を作り、いんねんを自覚したその時から、同じ話でも有難いなと思って聞かせていただけるようになりました。今まで喜べなかったことが喜べている自分に気付かせてもらうことができました。また心から有難いなと感じさせていただくことができました。

まだまだ成人の足りない未熟者ではありますが、少しでも陽気ぐらし世界に近づけるよう、また大教会の130周年祭、教祖140年祭と迫ってきてはいますが、少しでも心の成人をさせてもらえるよう、日々コツコツと歩かせてもらいたいなと思います。ありがとうございました。

松浦 治（まつうら おさむ）２９歳
天産分教会後継者
布教の家卒業後も石川県にて布教に歩いている。
趣味はドライブ
好きな食べ物はカレーライス

妻の不思議な出産

松田祐輝

私たち夫婦は現在２歳８ヶ月の長女と１歳３ヶ月の長男を神様から授けていただき、お世話させていただいております。今回は長男の出産に際してお見せいただいた不思議な出来事について書かせていただきます。

長男の出産予定日は７月１４日でした。妻の誕生日が７月１２日ということから、「２日早まって同じ誕生日になるかもね」と夫婦で出産を心待ちにしていました。迎えた７月１０日、夕方になって妻が陣痛を訴え、病院へと車を走らせました。しかし、病院に到着すると陣痛が止み、そのまま入院して陣痛が再開するのを待つことになりました。再び陣痛が強くなってきたのは翌１１日の夜のことでした。その頃、私はようやく長女を寝かしつけることに成功し、お願いづとめに取り掛かることができました。それまで隙間の時間でＬＩＮＥのやり取りをしていたのですが、「今から十二下りさしてもらう！」とこちらがＬＩＮＥを送ってから、妻からの返信が途絶えました。後の話によると、ちょうどお願いづとめを始めた頃から陣痛が強まり、分娩室へ移動することになっていたそうです。コロナウイルスの影響でその場に立ち会うことはできず、明確な状況をタイムリーに知るという手立てはありませんでしたが、返信が途絶えることで「状況に動きがあったのかもしれない」と予測できました。

２３時前にお願いづとめを終え、ただただ返信を待つ時間が続きました。しかし、妻が闘っている姿を想像すると、他に何もする気が起こらず、居ても立ってもいられなくなり、２３時半から再び十二下りのお願いづとめに取りかかりました。「２回目終わりました！」とメッセージを送ると、しばらくしてから「ありがとう。お陰で進んでいます」とだけ返信がありましたが、それからまた連絡がぱったりと途絶えました。

その後は具体的な状況が分からないまま時が経ち、とうとう深夜１時を過ぎたところで、さすがに疲労感と眠気を感じ、少し仮眠を取ろうとソファで横になりました。しかし、眼を閉じると再び妻が闘っている姿が目に浮かび、疲れて眠たいはずなのにどうしても仮眠が取れませんでした。そして、重たい身体を起こして三座目のお願いづとめに取り掛かりました。三座目のお願いづとめは意識が朦朧とし、何度もお手振りを間違えてはやり直しました。そうしてようやくおつとめを終え、「３回目終わりました」というＬＩＮＥを送信した時に、携帯の時計が１時４０分になっていることを確認しました。「もうこんな時間か」と思ったその瞬間、隣の部屋で寝ていた長女が「わあああああー！」と大きな声をあげたのです。寝ているときに急に声をあげて泣くことは、それまでにしばしばあったことですが、その声量はいつもの三倍ほどあり、その声の大きさに思わず私は身体をビクッと震わせるほどでした。「起きたか」と思い、部屋の襖を開けると、長女はムニャムニャと言いながらも安らかに寝ていました。私は「あれだけ大きな声をあげて、まだ寝ている

のは不思議だな・・・」と首をかしげ、そして不思議と「なんだかまるで産声みたいな大きな声だったな」と感じたのです。「まさか」と思い、すぐさま携帯を確認しに戻ると、返信はありませんでしたが、時計は変わらず１時４０分を示していました。

そして、程なくして１時４３分に分娩台に横たわりながら、生まれたての子どもを腕に抱いている妻の写真が送られてきました。私が「お疲れ様。ありがとう。１時４０分か？」と尋ねると、「そうです。ちょうど３回目が終わった時だね」と返事がありました。

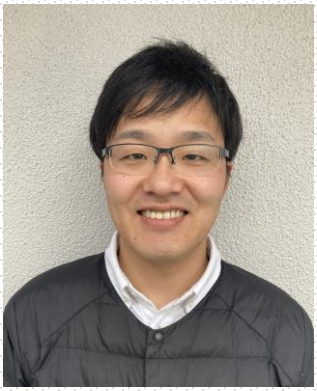
私が三座目のお願いづとめを終えたその直後に、長女が隣の部屋で産声のような声をあげ、遠く離れた病院で長男が生まれてきたのです。私はその１分にも満たない時間で起きた不思議な出来事に驚嘆し、そしてただただ有難く、ひたすらおぢばの方に向かって額づきました。

医療技術の進歩によって事例としては少なくなったとはいえ、出産でお母さんが命を落とすというケースは未だに存在します。つまり、母親は自分の命を懸けて子どもを産んでいると言えます。私はお願いづとめでひたすら妻と長男の無事を願っていましたが、「妻にもしもの事があっても、生まれてきた子どもを必ず人様の役に立てるようなよふぼくに育てます」と神様に誓っていました。今振り返れば、この時の私の心には我欲が混じっていなかったと感じます。

親神様は人間が我欲を忘れて人のたすかりを願えば、必ず鮮やかなご守護をお見せ下さると聞かせていただきます。そして、私はこのことを長男の出産を通して身をもって学ばせていただきましたような気がします。私にとって親神様の存在をより一層身近に感じさせていただくことができた非常にありがたい経験でした。

これから私たち家族は毎年７月１２日になると妻と長男の誕生日を一緒にお祝いし、この時の不思議な体験を語り合っていくのだろうと思います。

松田 祐輝（まつだ ゆうき）３１歳
櫟本分教会後継者
帝塚山大学大学院心理科学研究科卒業
旭日大教会にて事務所青年をつとめている。
好きな食べ物は御座候の白あん



第七十二回青年会旭日分会総会

【日時】

令和４年１１月２７日（日）

午前８時３０分

【場所】

旭日大教会

【内容】

おつとめまなび

式典

【記念講演】

青年会本部委員

「天理教青年会の未来予想図」